

# 親を思う心

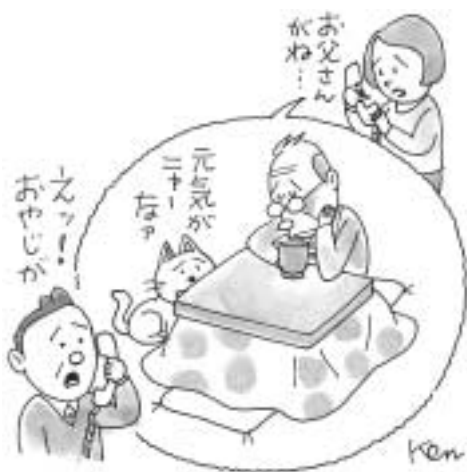
親を大切にしているつもり私たち。

でも、親の本心はなかなか気づきにくいものです。



# 仕事がいやになつた？

お正月気分も過ぎたある日、山田健一さん(47歳)に、妹の博子さん(43歳)から電話がありました。



「お兄ちゃん、年が明けてからお父さんのようすがどうも変なの。なんだか元気がないのよ」

「えっ、どこか体の具合でも悪いのか？元日に電話で話したときは、元氣そうだったけれど……」

「体は元氣なんだけど、どうも元気がないみたいなの」

「元気がないって、親父に何か心配事でもあるのか」

「それが、もう店を閉めたいって。仕事するのがいやになってしまったみたいなのよ」

「えっ」

# 元気がないのは年のせい？

健一さんは、東京都内の金融機関に勤めるサラリーマンです。地元の高校を卒業後、一浪して都内の大学に進学し、そのまま現在の会社に就職しました。奥さんと子ども三人の五人家族です。

健一さんの実家のある静岡では、両親が自転車店を細々と続けながら暮らしています。妹の博子さんは実家の近くに嫁いだこともあって両親の近況をいろいろと報告してくれます。

その博子さんから、仕事がいやになったという父親の話聞き、健一さんは思いをめぐらしました。

「そうか……。これまでさんざん働いて

きたからな。親父ももう年だし、いつかはそういうときが来ると思っていたけれど、それもいいんじゃないかな。これからは、少しゆつくりすればいいよ」

「私もそう思ったの。ところが、お母さんがすごく心配しているのよ」

「お母さんは、どう言っているんだい」

「お父さんは仕事が生きがいので、これまで仕事しかしてこなかったでしょう。趣味もないお父さんが仕事をやめたら、何も残らないって」

「確かにそうだね。ところで、お父さんがどうして仕事をやめたいのか、理由を聞いたのか？」

「それが私には言わないのよ。お母さんの話だと、〃自転車が売れないんじや、もう俺の出番はない〃と言っているらしいけど」

「そうか、博子は近くに住んでいるんだから、できるだけ顔を出して、親父のようすを見てやってくれ。頼んだよ」

「何よ、それ。お兄ちゃんはいつだつてそうなんだから。電話するだけじゃなくて、もつとお父さんとお母さんのことを考えてあげてよ」

「考えてやっているだろう。就職してからずつと仕送りしおくをしているし、出張に行つたときには土地の名物なんかを送っているだろう。こつちに家庭を持って生活していると、帰りたくてもそうそう帰れないことくらい分かつてほしいな」



「お兄ちゃんがよくやってってくれているのは分かっている。お父さんもお母さんも、健一は経済的にも心配いらななし、

# 現実の波の中で

いつもよく気を配ってくれているって、

喜んでいるわ。でも、とにかくお父さんは元気がないのよ」

「分かった。ちよつと考えてみるよ」

そう言つて電話を切つてから、健一さんは何となく父親のことが気がかりでし

た。

健一さんには、両親のことを常に気にかけていて、それなりのことはやっていると、自分もやっていると、博子さんが言うように、健一さんは自分でもよくやっていると考えていたのです。

父親ちちおやの孝こう一いちさん（72歳）は、四十五年前に自転車店を開業し、健一さんと博子さんを育てあげました。

健一さんが子どものころは、自転車といえど需要じしやうも多く、まさに飛ぶように売れた時代がありました。ところが、十数

年前から、店の経営は徐々じじゆに苦しくなつていきました。

特に、二年前、近くに大型のショッピングセンターができてからは、店の売上げは極端きょくたんに落ち込んでいました。ショッピングセンターで売られている廉価れんかな自



転車には、とても太刀打ちできません。孝一さんの店には、昔からのなじみ客が自転車の修理を持ち込むくらいになっていました。しかも、そのほとんどが、

ショッピングセンターで売られている自転車の修理なのです。

最近の、そんなようすを母親から聞いていた健一さんは、父親もわずかな修理代を稼ぐだけの今の仕事がいやになったのだろうと思いました。

健一さんは、実家に帰省するたびに両親の老いを少しずつ感じていましたが、両親は何の心配もなく、田舎でおだやかな老後をすごしているものとはかり思っていました。しかし現実の波は、両親にも押し寄せていたのでした。

お正月休みに帰省できなかった健一さんは、次の土日を利用して家族で帰省することにしました。そして、父親の思いをじっくり聞かせてもらおうと考えました。

# 郷里の空気

家族そろって帰省するのは久しぶりのことでした。駅から実家に向かう途中、町の家々にはまだお正月飾りが残っていました。われ先にと駆け出す子どもたちを見ていると、健一さんは自分の子ども時代のことを思い出しました。

山田自転車店の前にあつた空き地で、よく友だちとメンコやベーゴマをして遊びました。店先では、いつも父が働いていて、遊びに飽きると友だちと一緒に父親の仕事を見に行きました。友だちとの話題はいつも自転車のことで、自分が乗りたい自転車の自慢話でした。店先には最新型の自転車が並び、かたわらでは白



いつなぎを着た父親が働いていました。その手は油と鉄さびと泥で真っ黒に光っていました。

健一さんは、ふと、小学生だった自分が自慢げに、「僕も大きくなったら自転車屋さんになる。そしてみんなの大事な自転車が壊れたら直してやる」と話していたことを思い出していました。

「おじいちゃん、おばあちゃん、来たよ！」

「やあ、遠いところよく来たねえ」

うれしそうに孫たちを迎える両親を見て、健一さんは胸に温かいものが流れ込んでくるような気持ちでした。健一さんは、思いつき郷里の空気を吸い込みました。

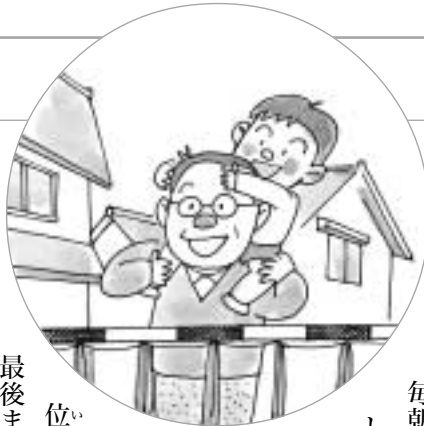
## 父の手

子どもたちが寝静まったあとのひと時は、両親と妻との四人で、お茶を飲みながら、子どもたちの成長のことや失敗談などで話が盛り上がりました。仕事をや



めたいという父親とじっくり話をするつもりで





来た健一さんでしたが、妻の話に目を細めている父親の前に、仕事の話を持ち出すことはできませんでした。

働き者の父、若いころの子煩悩だった父の姿が、健一さんの脳裏に次々とよみがえってきました。

電車が好きだった健一さんのために、

毎朝健一さんを肩車

して、近くの踏

み切りまで電

車を見に連れ

て行ってくれ

たこと。運動

会のかけっこ

で、転んで最下

位になったとき、

最後までよく頑張った

とほめてくれたこと。健一さんが反抗期

のころ、言い分を聞いて毅然として論し

てくれたこと。大学入試に落ちたとき、

何も言わずに悲しそうな顔をしていたこ

と。就職して初めてもらった給料の一部

を渡すと、仏壇にお供えしはずっと手を

合わせていたこと。そして、いつも油で

汚れていた父の手……。

健一さんは、湯のみ茶碗を持つ父の手

を見ました。父の手は健一さんのそれと

は違って、節くれだつて黒く汚れていま

した。それは、洗っても落ちることのない、染みついたものでした。

そんな父の手を見て、健一さんは心で

何度もつぶやきました。

“ありがとう、この手で僕も妹も育てて

もらったんだ”

# 伝えたい思い

数日後、博子さんから電話がありました。

「お兄ちゃん、この間はお疲れさま。お父さんもお母さんも喜んでいたよ。それでどうだった？ お父さん」

「それが、親父おやじのあの黒く汚れた手を見ていると、何も言い出せなかつたんだ」  
「どういうこと？」

「あの手のおかげで、僕も博子も今があるってことに気がついたんだ。そんな当たり前前のことを忘れていたよ。〃ありがとう〃 っていう気持ちもなしに、義務的義務的に仕送りしていた自分が、何だか情けなくてさ……」





「そう言われてみると、私も子どもころはお父さんの黒い手がいやだったけれ

ど、高校を卒業するころには、とても頼もしく感じていたわ。ところで、今年はどういう年か知っている？」

「どういう年って？」

「やっぱり、気づいてなかったんだ。お父さんとお母さんが結婚して、今年の二月二十日で五十年目よ」

「ああ、そうか。すると金婚式か。それじゃあ、何かお祝いをしなくちゃな。博子、何かいい考えがあるのか」

「そうねえ、遠くへ旅行に行くのはおつくだと言っているし、欲しい物もないようだしね。どうしたら一番喜んでくれるかしら」

健一さんは、金婚式をきっかけに両親に感謝の気持ちを伝える方法はないものかと考えました。

# 感謝の気持ち贈る

金婚式の当日、孝一さん・静子しずこさん夫妻を祝って、健一さんの家族五人と博子さんの家族四人が集まりました。場所は



実家から車で一時間ほどのところにある温泉旅館おんせんりやかんです。子どもや孫たちにだ囲まれて、孝一さんも静子さんも、とてもうれしそうです。

食事をはさんで、孫たち全員から歌のプレゼントがあり、そのあと孫たちがそれぞれに工夫くふうを凝こらして作った数々の作品が贈おくられました。色紙いろがみの首飾くびかざりり、孝一さん・静子さんの似顔にがえ絵、カラフルに彩いろどられたお祝いのメッセージカードなどです。

最後に、健一さんと博子さんが並んで立ち、両親へのメッセージを読み上げました。それは次のような内容でした。

## 感謝状

お父さん、お母さん、金婚式おめでとうございます。

お二人そろって元気に結婚50年目を迎えることができたこと、子どもと孫一同で、心よりお祝い申し上げます。

お二人のこの50年間は決して順調なものではありませんでした。しかしそうした中、お二人は祖父母によく孝養を尽くしてくれました。経済的に苦しい中でも、家族のために一生懸命に働いてくれました。お父さんとお母さんが一生懸命働いて頑張ってくれたことを、私たちはみんなよく知っています。私たちは、その後ろ姿を見て育ちました。

お父さん、お母さん、お二人の育てた子どもは、おかげさまで今こうして元気に成長しました。お二人の貴重な50年の苦勞、努力は、見事に実を結びました。これから先、さらに大きな大きな花を咲かせることでしょう。私たち子どもと孫一同、お二人の人生をしっかりと受け継ぎ、次の世代に伝えていきたいと思います。

お父さん。お父さんの黒く汚れた手は私たちの誇りです。  
お母さん。お母さんの優しい笑顔は、私たちの宝です。

お父さん、お母さん、本当にありがとうございました。これからも私たちの親として、祖父母として、精神的な拠り所であり続けてください。

# とり戻した「元気」

しばらくして、健一さんのもとに、母親の静子さんから手紙が届きました。母からの手紙は珍しいことなので、健一さんは驚きました。

——先日はあんなにまでしてもらって、ありがとう。お父さんもお母さんも、とてもうれしかった。いただいた感謝状は、毎日、お父さんと二人で繰り返し読み返しています。

お父さんとお母さんは、子どもたちに恵まれました。これまで苦勞してきたけれど、苦勞してきてよかったと思っています。本当にありがとう。

お父さんは、だいぶ元気になりました

よ。あれ以来、仕事をやめたいといううなことはひと言もいけません。それどころか、大きな紙に「パンク、修理、何でもOK!」と書いて店頭に張り出しました。私は恥ずかしいからと言ったのに。でも、お客さんが来ると、とても楽しんでに仕事をしています。やはり自転車修理はお父さんの生きがいだったようです。きつと体が続く限りやっていくのでしようね。お前たちも体にはくれぐれも気をつけて——

健一さんは、両親が心から喜んでくれたことが分かって、とても幸せな気持ちになりました。

## 親の思いを受けとめる



人はだれでも自分の役割を認め

られてこそ生きがいを感じます。

親もまた同じではないでしょうか。

身体的・経済的には子の援助

を受けているとしても、親として

子に認められ続けることは、親の

喜びです。

核家族化して、親と一緒に住む

ことが少なくなっている現代で

は、子は親の思いに気づきにくく

なっています。

親を思う心を育てることは、私

たち自身の心を成長させる大切な

鍵といえるでしょう。